



# 崇峻天皇 暗殺事件

豐田有恒

講談



---

すしゅんてんのうあんさつじけん  
崇峻天皇暗殺事件

とよたありつね  
豊田有恒

© Aritsune Toyota 1990

1990年11月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに  
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。  
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内  
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい  
たします。(庫)

ISBN4-06-184806-2

---

江苏工业学院图书馆

藏书章

崇峻天皇暗殺事件

豊田有恒

講談社



目次

|     |                                                       |     |
|-----|-------------------------------------------------------|-----|
| 第一章 | 大王刺殺 <sup>おおきみころし</sup>                               | 9   |
| 第二章 | 死穢 <sup>しえ</sup> の宮                                   | 36  |
| 第三章 | 仏師止利 <sup>とり</sup>                                    | 47  |
| 第四章 | 犯人の死                                                  | 69  |
| 第五章 | 大兄 <sup>おおえ</sup> の王子 <sup>みこ</sup> の屍 <sup>かばね</sup> | 81  |
| 第六章 | 難波 <sup>なにわ</sup> の水門 <sup>みなと</sup>                  | 106 |
| 第七章 | 膳 <sup>かしわで</sup> の三穗 <sup>みほ</sup>                   | 123 |
| 第八章 | 母の秘密                                                  | 142 |
| 第九章 | 犯人の父の死                                                | 168 |
| 第十章 | 島の宮                                                   | 189 |

第十一章 忍者誕生

第十二章 妃の死

第十三章 みずしろかね 水銀の謎

第十四章 いけのべ 池辺の宮襲撃

第十五章 陰謀露見

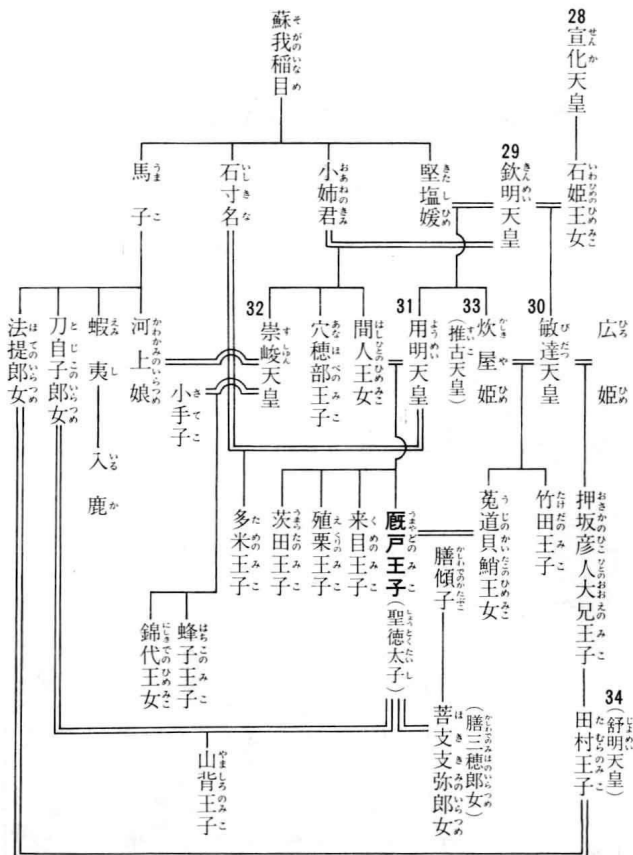
第十六章 黒幕は誰か？

あとがき

解説 井沢元彦

318 312 296 289 266 243 232 208

聖德太子關係系図



二重線(==)は婚姻關係を表わす。数字は天皇の代数。

[illegible]

津

山

背

難波津

河

生駒山

平群

信貴山

若草山

三笠山

大

三輪山

和

石榴石市

倉橋

香

鳥

▲多武峰

稻淵

古市

穴虫峠

磯<sup>水</sup>

長

竹内

- 111

2

葛ば

城

1

飛

鳥

川

八  
停山

方口

7

3

/

和

泉



崇峻<sup>すしゅん</sup>天皇暗殺事件



第一章 大王刺殺  
おおきみさしころし

「ここがよい。ここで待つとしよう」

厩戸の王子は、枯草ばかりになった土手の上に、ひとりごちながら、どつかと腰をおろした。十八歳になったばかりの王子は、行きかう人々を見おろしていた。

ここ倉橋の宮のあたりは、いつになく賑わっていた。里人たちは、いちばん汚れていない麻の筒袖の衣類を、身につけている。せいぜい美しく着飾ったつもりなのである。あまり楽しみのない毎日であるから、これから起こることに、おおいに期待しているわけであろう。

王子は、初瀬へ向かう街道から、ややはなれた土手の高みに位置をしめていた。集ってきた近在の里人たちは、道のまわりにひしめいているが、そこにいたのでは、やってくる行列が通りすぎてしまえば、それまでである。その点、ここに陣どつていれば、一部始終を見届けられるにちがいない。

もちろん、先の池辺の大王（用明天皇）の王子という身分をもちだせば、倉橋の大王（崇峻天皇）の傍らから、この行事に参加することもできる。王子は、宮殿の階段の上から、やってくる

人々を引見する立場にあり、事実そうすることを求められてもいた。しかし、十八歳の青年は、そうしたくなかった。大王のもとで行事に参加したのでは、せつかくの観物が台なしになってしまふ。そのせいばかりでなく、かたくるしい想いをしたくなかった。

厩戸の王子は、妃のことを考えた。一緒に連れてきてやりたかったのだが、ここの十日ばかり会っていないかった。妃の名は、刀自子の郎女といい、蘇我の馬子の大臣の娘である。大和きつての大豪族の生まれのせい、妃は、わがままなところがあり、気まぐれでもあった。ここの十日ほど、王子が通つていっても、島の宮、石川の宮のどちらにもいなかった。いずれも、馬子の館のあるところだが、妻のもとに通つていく男の気持など、刀自子の郎女にとっては、どうでもいいことかもしれない。事実、王子は、もう一月も、妃と講合をしていなかった。妃との仲は、あまりうまく行つていないのである。

十八歳の青年は、土手の上で両足を投げだし、両腕を組んで待った。秋の終りである。あたりは、かなり寒くなっている。しかも、吹きさらしの土手の上では、薄い単衣を着ているくらいでは、今にも凍えそうにすら思えてくる。

枯れた芒をかきわけて、王子の隣りに、一人の男が坐りこみ、野太い声で言った。

「弟よ、なかなか始まらぬではないか」

そう言ったのは多米の王子——この王子の異母兄である。王族にふさわしくない、薄汚れた筒袖を身につけている。なりふりかまわず、野放図なところがあるが、筋のおつたところも持ちあわせている兄である。

「兄君か。さきほどより、宮殿のあたりがよく見えるところと思い、ここに坐りこんではみたものの、どうも寒くていかぬ」

「ならば、汝は、宮殿におられる大王の隣りで、見物すればよからう」

多米の王子は、答えた。二人とも、先代の池辺の大王の王子であるが、母の素姓がちがう。厩戸の王子のほうは、母が王族の出であるから、年齢の上下とはかわりなく、王位に近い立場である。兄の王子は、そのことを言ったつもりなのだが、べつだん嫌味のつもりではないらしい。

「いや、宮殿から見物するのでは面白くない。それが嫌だから、ここにこうして陣取っているわけなのだ」

厩戸の王子は、すなおに答えた。この兄に対しては、なんでも話すことができた。

「ところで、弟よ。大王と馬子の大臣のことじゃ。巧くいかぬものかのう？」

多米の王子は、話題を変えた。厩戸の王子は、おもわず左右を見やった。野放図な性格の兄は、ものごとを肚にためておくのが苦手である。だからこそ、さっぱりした男っぽい気性の相談相手として、こちらも飾らずに接していける。だが、今の言葉は、ことが大和の王家の行末にかかわるだけに、あまりにも重大である。

「岳父どのは、大和きつての大豪族。叔父なる倉橋の大王は……」

王子は、言いかけて、口ごもった。大王は、気性の激しい人であると、言おうとしてから、あたりを憚って口をつぐんだ。

「ま、困ったことだな。ところで、蝦夷というのは、人気のあるものだな」

多米の王子は、また話題を変えた。弟の王子には答えにくい話題を口にしてしまったことを、氣にかけてくれたためにちがいない。

ここに集まった人々は、東の国からやってくる蝦夷を見物にきたのである。

「このまえの折に、蝦夷を見られなかった者どもも、たくさん集まっておるそう。噂をきいて、宇陀や初瀬の山奥からやってきた者もおる。みな楽しみにしておる」

厩戸の王子は、説明した。一年ばかりまえ、蝦夷がやってきた時、兄の王子は宮処にいなかったからである。

蝦夷とは、当時、関東から東北にかけて住んでいた民族で、漁撈と採集に頼って生活していたらしい。現在でも、ベツ、ナイなどのつく地名が、関東地方ですら残っている。アイヌ語に由来するものと言われている。当時、蝦夷と呼ばれていた人たちが、和人と別の人種であったか、あるいは今日のアイヌ人であったか——という点は、よく判っていない。ただ、最小限いえることは、今日の関東から東北にかけて、アイヌ語を共通語とする別の文化圏があったことである。当時の日本は、単一民族国家でもなければ、大和朝廷によって統一されていたわけでもなかったのである。

「蝦夷が大和へやってくると、毛皮を土産にして、代りに酒と米をもらって帰るそう。そのかわりに、変った踊りをやるそうだな」

多米の王子は、まえの機会に見損なっているだけに、蝦夷には興味があるらしい。

「うむ、蝦夷の国は、はるか東、遠い北の方にある。寒い土地で、稲が実らぬという。だから、

米を喜ぶのじゃ」

厩戸の王子は、説明を続けた。

現在の東北各県は、米作地帯である。しかし、稲——オリザ・ジャポニカは、熱帯性の栽培植物である。東北でも弥生遺跡から、種籾たねもみが出土している。稲作をやってみたのだが、巧いかなかったため、その後、断念したらしい。弥生時代にかぎらず、米作が冷害に遭い、娘が身売りしたという時代まで、一世紀とさかのぼることはない。蝦夷は、未開民族であるため稲作を知らなかったわけではなく、いったんは稲作を手がけたものの、熱帯性の稲の作況が不安定であつたため、放棄してしまつたのである。

ともあれ、この六世紀末、蝦夷が、畿内うちつくにの大和の住民と異り、稲作を行なつていなかったことは確かである。

「蝦夷がやってくるぞーっ」

先触さきふれの舍人とねりが駈けながら、呼ばわつた。この寒いのに、下は犢鼻褌たふさばしか身につけていない。沿道で待つ人々に、走りながら触れあっているの、あまり寒さを感じないためであろう。

街道に沿って、はるか向こうから、行列がやってくる。大和の人々は、娯楽たのしみに乏しいためもあつて、今日のこの日待ちうけていた。先導さきがけの舍人につづいて、七、八十人ばかりの蝦夷がやってくる。身に鹿皮しかがわ、猪皮いのかわをまとっているのは、いかにも最涯さいはての寒い土地からやってきた人々にふさわしい。手には短い弓矢を持っている。沿道の人々は、恐ろしげに首をすくめるが、恐いもの見たさで、また身をのりだす。

實際、大和の人々は、蝦夷がやってくるのを待ちうけていた。そこには、妙な差別感情は、まったくなかった。蝦夷は、非武装のはずの訪問でも、弓矢は手から放さない。のちに阿倍の比羅夫の遠征軍も、二つの文化の相違に出会っている。弓矢は、狩猟民族にとっては、生産手段であり、武器ではない。農耕民族における鋤鍬のようなものである。その気になれば、人を殺すこともできる点では、鋤鍬でも同じだが、あくまで獲物をとるための道具である。

「毛皮を持つてくるそ、うだが」

多米の王子は、かさねて問いかけた。

「鹿、猪、熊などの毛皮を、贈り物として持つてくる。兄君よ、われらと違う暮らしをしている人々だが、親しみやすい、良い連中だ」

王子は、兄にむかって早口に話し、やおら立ちあがった。近付いてくる蝦夷の隊列にむかって、土手の上から手をふると、むこうからも一人が列をはなれた。

「おい、チロンヌブよーっ」

「ウマヤドノミコーッ」

蝦夷は、こつちへ駆けよつてきた。顔は黒い髭で覆われているが、深く落ちくぼんだ眼には、若々しい輝きがある。

「兄君、蝦夷の大酋長アヤカスの息子、チロンヌブじゃ。これは、兄の多米の王子」

王子は、二人をひきあわせた。

「オレ、チロンヌブ、ウマヤド、友ダチダ。ウマヤドノ兄、オレノ仲間ダ」



「チロン……？ もう一度、名をきかせてくれぬか？」

多米の王子は、照れくさそうに訊きかえした。一度おしえられただけでは、蝦夷の名を覚えられなかったのである。

「チロンヌブ、大和言葉デ、キツネ」

「チロンヌブ、キツネ……？」

多米の王子は、首をひねった。

「兄君、チロンヌブは、この男の本名ではない。本名を名のると、悪霊に魅入られるから、秘密にしておくのだそうな」

厩戸の王子は、ふたたび兄にむかって説明した。チロンヌブとは、まえに蝦夷の一行がやってきた時、すっかり意気投合した仲である。

「ウマヤド、アトデ、マタ会オウ」

チロンヌブは、一礼して土手を駆けおりていった。

蝦夷たちは、隊列を保って進みながら、奇妙な手付きで、舞い踊っている。厩戸の王子は、蝦夷の踊りのことを、チロンヌブから、まえに聞かされていた。

「ホイヤ、ホイヤ、ハイクル、ヘーランネ、ホイヤ、ホイヤ」

蝦夷たちの掛け声は、歯切れのいいものである。隊列は、その掛け声に合わせて、踊りながら進んでいく。道は下りになり、倉橋の宮に続いている。

彫軽な身ぶり手まねで、蝦夷の隊列が進んでいくと、見物の里人たちは、大喜びである。なか